

BOOK REVIEW

ミミズと土

チャールズ・ダーウィン 著 渡辺弘之 訳 平凡社ライブラリー

昨年まで住んでいたマンションの3階のベランダで、いつものようにだめにしてしまった鉢植えの土をふるい分けている時に、その土の中からかなり大きなミミズが二匹這いだしてきたことがありました。マンションの周囲は、かわいがっていた小鳥が死んでも、埋めるために掘り返す土がどこにもなく、すべてがコンクリートで覆われた街の中で、それだけにミミズたちの蠕動はなんと大きく、強く感じられたことでした。

ダーウィンによれば、この小さな虫は土地がやせていて草が短く、まばらにしか生えていないような場所にも、また家屋に接した舗装された中庭や、湿った地下室の土間など、あらゆる地下空間に偏在するのです。園芸家の方々には、ミミズが土を耕し、土壌改良に一役かっていることは周知の事実でしょう。しかし彼はまた、岩を崩し、土地を侵食することによって、古代の遺跡を埋没させたりもするのです。

——広い芝の生えた平地を見るとき、その美しさは平坦さからきているのだが、その平坦さは主として、すべてのでこぼこがミミズによって、ゆっくりと水平にさせられたのだということを思い起こさなければならない。——

荒々しい自然の岩山を排し、整形式の花壇を排して一面の芝生にかえたイングリッシュ・ガーデンの可能性=ケイパビリティは、一人のガーデン・デザイナーの仕事であるより、むしろ無数のミミズたちの仕業にあるのかもしれない。

ダーウィンが1842年から没年まで約40年間住んだケント州にあるダウンハウスの庭が今年から公開されていると聞きますが、その地下ではダーウィンが飽くことなく観察し、その習性を研究するための実験を繰り返したミミズたちの子孫が、今も土を噛み、掘り返し、崩すという果てしない作業を続けていることでしょう。

さて、普通に生活をしていれば陽の当たる場所にでてこないこの小さな虫たちを、我々はふだんどのように感じているのでしょうか。例えばミミズの絵を描け、といわれて我々にできることはどんなことでしょうか。おそらくヒモのような二本の線と、その間に帯状にきざまれた体節をかきこむのが最も単純で、しかもそれ以上詳細に描きようのない方法ではないのでしょうか。

手足はもちろんのこと、人間がどんなアイコンにも無理やり見いだしてしまう目鼻、つまり顔にあたる部分がこの虫にはみいだせないのです。つまり彼らは我々にとって最も感情移入のしにくい存在だといえるでしょう。いいかえれば、一番身近にいながらもその生活の全く見えない、不気味な存在。

ダウンハウスの庭を逍遙し、立ち止り、すわりこんではまた立ち上がりながら、ダーウィンは、その不気味さに目鼻をつけていったのです。どうすれば地面に落ちた一枚の葉を自らの巣にひきこめるだろうか。葉先をくわえようか、葉柄をくわえようか。ダーウィンの観察によって、のっぺらぼうだったミミズたちには決断と逡巡が与えられ、何よりそれを支える知能が与えられました。そして、その人間の感情と一番遠いところにあった小さな知能の集積が、人間世界でひとつの美の基準までをつくりあげてしまう不思議さ。

そしてその同じ営為が、我々の庭でもまた同じように繰り返されているのを見るとき、ダウンハウスの庭は、垣を越えてそのまま私たちの庭につながってくるでしょう。その垣の下を越えて。